

平成 26 年度 学校経営計画及び学校評価

1 めざす学校像

二兎を追う大阪で一番元気のある学校～希望進路の実現 100%と自主活動への取組み 100%～

- 1 第一希望の進路を実現できる確かな学力の養成
- 2 さまざまな自主活動を体験する中で、生徒ひとりひとりが授業にはない「自主活動における学びの魅力」を発見し、発信していける学校
- 3 グローバルな視点を持ち高い志を抱いて社会に貢献する人材の育成
- 4 芸能文化の学びの中で新たな自分を発見し、大阪の文化の発展に寄与できる人材の育成
- 5 中学生が“ヒガスミ”を体験・体感・実感し適切に進路選択できる広報の展開

2 中期的目標

1 第一希望の進路を実現できる確かな学力の養成

(1) 第一希望の進路を実現が叶うように、生徒が生き生きと授業に取り組む学校をめざす。

- ア 生徒が生き生きと授業に取り組む授業づくりのために、公開授業や研究授業、学校教育自己診断、授業アンケート等を効果的に活用する。
- イ 新学習指導要領を踏まえ、習熟度別授業、選択科目の充実を図る。

(2) 当たり前のことが当たり前でできる生徒を育成し、学力向上の土台作りをする。

- ア 遅刻を少なくするなど、学習の土台となる生活習慣の確立をはかる。
- イ 生徒が心身の健康を保ち学校生活を送れるよう、学校保健の取組みの充実を図る。

※ 生徒向け授業アンケートにおける生徒取組度（平成 25 年度アンケート 4 段階評価で 3.10）を平成 28 年 3.20 を目標とする。

2 さまざまな自主活動を体験する中で、生徒ひとりひとりが授業にはない「自主活動における学びの魅力」を発見し、発信していける学校

(1) 生徒会活動（行事）を充実する。

- ア 本校生徒会における最大の行事として位置づけ、本校独自の「学年縦割り」と「応援」「アトラクション」「マスコット」「スタンド」の活動の中で上級生が下級生を指導する体制を維持し、よき伝統が継承されるようにする。
- イ 文化祭における 3 年生「コーラスコンクール」の継承とともに、1・2 年生の取組みの充実を図る。
- ウ 生徒が積極的にまた安全に部活動に取り組めるよう、指導者の確保や施設設備の整備等の環境整備に努める。

※ 生徒向け学校教育自己診断における学校満足度を 100%に近づける。

(2) 外部との連携とボランティア活動を充実する。

- ア チャリティーマラソンの実施（陸前高田高校とネパールへの支援）、異校種間の交流・連携、近隣の施設や地域の催しへの参加、クリーンアップキャンペーンなど、様々な外部との交流・連携事業やボランティア活動を積極的に推進する。

※ ヒガスミの行事への保護者の来場者・参加（平成 25 年度体育祭・文化祭 4,112 名）をさらに増やす。

3 グローバルな視点を持ち高い志を抱いて社会に貢献する人材の育成

(1) 他者への思いやりと貢献意欲を強く持ち、行動へ移すことのできる、国際社会で必要とされる人材を育成する。

- ア 海外から見た日本を知る機会や異文化を体験的に知る機会として、また、母語以外の言語によるコミュニケーションを体験する機会として、平成 26 年入学者から 3 年間台湾への修学旅行を実施することとし、3 年目にその検証を行う。
- イ 国際交流委員会を核として、生徒の海外研修を含め海外の学校との交流活動を推進する。英語に特化した研修と異文化体験を 1 年おきに行う。
- ウ 芸能文化科の生徒を中心に据えて、外国の生徒に日本の伝統的文化を体験してもらう機会を持つだけでなく、外国の教育関係者に日本（特に大阪）の伝統文化教育の意義と成果を積極的に発信する

※ 年間 5 回程度の海外交流を継続して実施する。（平成 25 年度 5 回）

- ウ 国際社会における意思疎通の手段の一つとして重要な位置を占める英語でのコミュニケーション能力を高めるため、授業・補習にとどまらず、朝の HR を利用した英単語テスト、英語の資格試験対応講習、ALT を活用した様々な取組み等を積極的に推進する。

※ 生徒の英語の資格試験合格率（平成 25 年度 57%）を平成 28 年度 70%を目標に上げる。

(2) 「総合的な学習の時間」と LHR 等を活用して「志学」の全学年実施を行うなど、キャリア教育と人権教育を一層推進する。

- ア 生徒のキャリア意識を高め第一希望の進路を明確にするために、大学教員による模擬授業を実施する。
- イ 生徒や保護者を対象とした府内外の大学見学会や大学説明会を実施する。
- ウ 生徒の自立的・自律的学習のための環境を整える。
- エ 外部機関を活用して効率的に情報収集、情報分析を行うとともに、志望校情報交換会などの取組みを行い、生徒支援のための情報共有を進める。
- オ 「志」において、プレゼンテーション、現役社会人の講義、社会の第一線で活躍する卒業生の職場訪問などを行い、社会人としての将来を思い描かせ、高い志をもつ姿勢を身につけさせる。
- カ 学力診断テストの結果分析会、志望校検討会を実施するなど指導方針の共通理解を形成しより効果的な進路指導を確立する。

※ 生徒の希望する進路の実現率（平成 24 年度 83%）をさらに上げ、平成 28 年度 90%をめざす。

4 芸能文化科の学びの中で新たな自分を発見し、大阪の文化の発展に寄与できる人材の育成

(1) 芸能文化科の取組を核として、国際社会において、日本の伝統や文化を積極的にかつ自信を持って発信し交流できる人材を育成する。

- ア 芸能文化科の専門科目の一層の充実を図るために、特別非常勤講師や大阪芸術大学、近畿大学等との連携を強化するとともに、新たな連携先を発掘していく。
- イ 様々なメディアを通じて、芸能文化科の教育内容や外部連携の内容が伝わるよう情報発信を行う。
- ウ 芸能文化科が長年に渡って行ってきた社会貢献により構築したネットワークを活用して、応援団的ネットワーク作りを推進する。

※ 年間を通じた大学教員による授業、外部との連携事業（平成 25 年度 5 事業）を維持拡充する。

5 中学生が“ヒガスミ”を体験・体感・実感し適切に進路選択できる広報の展開

- ア HP の充実やマスメディアの活用による広域的な広報活動を行い「入りたい学校」としての存在を示す。
- イ 体育祭、文化祭チャリティーマラソンの一般公開、授業公開を行い、日頃協力いただいている地域の方々や本校への入学を希望する小中学生への情報発信をはかる。
- ウ 小高連携授業など和文化的の普及継承に取り組む。
- エ 「学校説明会」において、模擬授業を行い本校の授業を体験する機会を提供するとともに、ICT 機器を活用した説明を行い、本校の学校生活活動を通じていかに生徒の自主性が養われ、その自主性が学習活動における頑張りにつながっているのかを積極的に発信する。
- オ 生徒と教職員が一丸となって学校説明会や中学校訪問等を行う。

※ 学校説明会への来場中学生数（平成 25 年 12 月末時点対募集人員比 3.1 倍）を増やす。

【学校教育自己診断の結果と分析・学校協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析 [平成 26 年 11 月実施分]	学校協議会からの意見
<p><生徒></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 57 各期生の経年変化 (58 期生 2 年生⇒3 年生、59 期生 1 年生⇒2 年生) では、58 期生が大半の項目で最上位回答が 10%以上増加していることが特徴的である。 ○ 前年度の同一学年との比較では、2・3 年生がほぼ前年並み、1 年生の肯定的評価が平均約 9 ポイント低下している。 ○ 特に「授業」、「相談できる先生の存在」、「命の大切さや社会のルール」の項目が 10 ポイント以上低いことが課題である。また、学校全体 (12 月末) として遅刻が 400 回余り減少する一方、欠席が 1500 回余り増加しているこの項目に連関があると考えられる教員の自己評価でも 5~15 ポイント程度最上位評価又は肯定的評価が低くなっている。教員は生徒の状況を把握・認識出来ており、運営委員会、いじめ対策委員会、職員会議、若手校内研修において情報共有と対策の検討を進めているところである。次年度の「本年度の取組内容」に対策を明記する。 ○ 今年度新たに設けた「違いを認め合い成長できるか」については、肯定的回答 86%うち最上位 38%であった。今後変化を見て行く。 <p><保護者></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 前年度と殆ど変化はない。昨年度の 1 年生と今年度の 1 年生との比較で、生徒の評価が大きく変化していることに保護者の評価が連動していないことに課題がある。教員が感じている教育課題を三者懇談や家庭訪問などの細やかな対応により保護者との共有を図り、一層連携を深めて生徒の教育を進める必要がある。 <p><教職員></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 「職員の適材適所の活用と職務意欲」は H24 年 (前校長) 度 60% から H26 年度 78%に、「学校評価の次年度計画への活用」は H24 年度 57%から H26 年度 78%に年々向上している。職員の活力が向上するとともに学校経営計画 (PDCA サイクル) が浸透してきたと評価している。 ○ 校長のリーダーシップの最上位評価が H25 年度 19%から H26 年度 31%と向上した。「トップダウン」を必要に応じて交えつつ「校長のめざす学校像とビジョンを教員にしっかりと浸透させることで、教員に自ら実現のための必要条件 (戦略) と具体策 (戦術) を考え実行させること」により適切なリーダーシップの在り方を、幹部教職員が理解し評価するようになってきたと捉えている。 	<p>第 3 回学校協議会 (平成 27 年 1 月 31 日) 開催</p> <p><学校教育自己診断></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 87%の生徒が学校へ行くのが楽しいと答えていることは素晴らしい。 ○ これまで 90%以上であったことから比べると下がっている。大阪府全体で中学校が近年で一番しんどい状況にある。そのことが 1 年生の肯定的回答の低下に表れている。 ○ 教員が 9 時頃まで学校にいる中学校が 7~8 割あるとも聞いている。 ○ 自己診断の結果からは、大部分の生徒は順調に成長している。不登校やネット依存などで、ネガティブになっている生徒のケアに力を注ぐことが求められている。 ○ 受け入れた以上は、卒業させるという意識も大切だが、楽をしても卒業できるという意識を生徒が持たないように取り組む必要がある。 ○ 不登校や人間関係がうまく築けない生徒は、これまでの東住吉高校には少なかっただろう。先生が変わってもらい、個別の生徒へのきめ細かな対応をしてもらう必要がある。 ○ 今まで前向きな生徒の育成という方針でできていた。自己診断に表れた変化を、1 年生だけの問題にせず、学校全体の取組みにし、しんどい生徒が自己実現できる場を作してほしい。 <p><平成 27 年度学校経営計画></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 東住吉高校は、自分から家庭で学習できない生徒が少なくない。そこを乗り越えないと学習時間の確保は出来ない。 ○ スマホと勉強時間の相関関係も課題。 ○ 指標をどうするかは検討が必要だが、「1 週間に 10 時間の家庭学習課題を与える」という取組みを行うなら、授業以外に 2 時間以上学習する生徒については 50%以上を目標にしないと、取組みとの整合性について指摘されることもあるだろう。 ○ 30 時間・100 時間学習マラソンについて、部活動をしている生徒も参加できるように、工夫が必要である。 ○ 家で勉強しないなら学校で勉強させる。 ○ 学習マラソンや自習室の運営は、先生の負担も大きいので O.B の活用も考えるべき。 ○ 先生の負担を軽くする方が大切だ。 ○ 大学生を使うべき。教職をめざす学生にとってもいいことなので、協力はさせてもらう。 <p><その他></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 新 1 年生の動向を見る中で、現 1 年生の課題を探してほしい。 ○ 多くの生徒は順調に育っている。一部の生徒の変化が、全体に影響することのないよう取り組んでほしい。

3 本年度の取組内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価
1 第一希望の進路を実現できる確かな学力の養成	<p>(1) 第一希望の進路を実現する授業づくり</p> <p>(2) 学力向上の土台となる生活習慣の確立</p>	<p>(1)</p> <p>ア・生徒が生き生きと授業に取り組む授業づくりのために、学校教育自己診断、授業アンケート等を効果的に活用する。</p> <p>・全教科で研究授業を行い、生徒が生き生きと学ぶ授業づくりに取り組む。</p> <p>(2)</p> <p>ア・S.H.R. を生徒育成のための重要な時間との共通理解のもとに実施し、当たり前のことが当たり前にできる生徒の育成と学力向上の土台作りを行う。</p> <p>・携帯電話等の使い方について自覚を促す働きかけを強め、学習を柱にした生活をめざさせる。</p>	<p>(1)</p> <p>ア・生徒向け授業アンケートにおける生徒取組み度 (平成 25 年度アンケート 4 段階評価で 3.10) を向上させる。</p> <p>・全教科での研究授業・研究協議の実施</p> <p>(2)</p> <p>ア・前年度約 42% (1 人当たり 3.50 回) に減少した遅刻を、1 人あたり 3.33 回を目標に更に減らす。</p> <p>・2 年生 10 月時点での自宅学習時間 2 時間以下の生徒を 50%以下にする。</p>	<p>(1)</p> <p>ア・生徒向け授業アンケートにおける生徒取組み度は、平成 26 年度アンケート (第 2 回) で 3.15 に向上した。◎</p> <p>・全教科での研究授業・研究協議を実施した。実験と ICT を融合した化学の授業や、生徒に詩の解釈を発表・協議させる授業など新たな取組みが見られた。また、本時の目標を最初に提示する教員が増え、そのことが授業アンケートの授業計画の項目の 3.3 という高い評価につながったと思料される。◎</p> <p>(2)</p> <p>ア・前年度からさらに減少した。1 人あたり 3.33 回から 2.37 回に約 30%減少した。◎</p> <p>・2 年生 10 月時点での自宅学習時間 2 時間以下の生徒は約 60%であった。△</p>
2 「魅力」を発見し、発信している学校	<p>(1) 自主活動の更なる充実</p> <p>(2) 外部との連携とボランティア活動の充実</p>	<p>(1)</p> <p>ア・体育祭応援団の夜間校外活動の根絶を維持し、生徒に集中と切替えの意識を徹底させるとともに、生徒会執行部、団活動 (応援、アトラクション、マスコット、スタンド)、体育祭実行委員会の活動を通じて、綿密な計画と準備過程の大切さを体感させる。</p> <p>イ・体育祭、文化祭の活動を様々な場面を通じて発信し、大勢の観客に来ていただくことによって、本校の自主活動のよさを理解していただくとともに生徒に成功体験をさせる。</p> <p>(2)</p> <p>ア・芸能文化科生徒及び部活動所属生徒による小学生との交流授業や老人介護施設訪問、チャリティーマラソン、小中学生対象理科実験教室、クリーンアップキャンペーン等を継続して行う。</p>	<p>(1)</p> <p>ア・学校教育自己診断における体育祭・文化祭、学校行事の項目の肯定的回答 (前年度 95%) を 100%に近づける。</p> <p>イ・体育祭及び文化祭の来校者数 (平成 25 年度 4112 名) を維持する。</p> <p>(2)</p> <p>ア・学校教育自己診断におけるボランティアに関する項目の肯定的回答 (平成 25 年度 93%) を 100%に近づける。</p>	<p>(1)</p> <p>ア・学校教育自己診断における体育祭・文化祭、学校行事の項目の肯定的回答は 95.9%であった。学年進行とともに肯定的回答が高くなっており、教育効果が上がっていると評価している。◎</p> <p>イ・体育祭及び文化祭の来場者数は受付数 4353 名で、前年比約 240 名増加した。また、地域の方に平時に「東住吉高校は自分たちの誇り」と声を掛けていただくなど、有難い評価をいただいている。◎</p> <p>(2)</p> <p>ア・学校教育自己診断におけるボランティアに関する項目の肯定的回答は 93%であった。学年進行とともに肯定的回答が高くなっており、教育効果が上がっていると評価している。○</p>

府立東住吉高等学校

<p>3 グローバルな視点を持ち高い志を抱いて社会に貢献する人材の育成</p>	<p>(1) 国際社会で必要とされるコミュニケーション能力と携帯・インターネットに関する人権意識の育成</p> <p>(2) 希望の進路を実現する進路指導の確立</p>	<p>(1) ア・国際社会における意思疎通の手段である英語でのコミュニケーション能力を高める機会として、ニュージーランド語学研修を実施する。 ・英語でのコミュニケーション能力を高めるため、朝の S. H. R. を利用した英単語テストや英語の資格試験対策講習を実施する。 イ・携帯・インターネット使用上の人権啓発を含め、他人に優しく違いを尊重できる豊かな人間性の育成のために、講演会等の取組みを進める。</p> <p>(2) ア・志望校情報交換会を前期・後期に開催して、生徒の志望校に関する情報を共有し、第一希望の進路実現を学校として支援する。 ・大阪府内の高校卒業生数が増加する中で現役での希望進路の実現に実績を向上させてきたこと及び今後更に大阪府内の高校卒業生数が増加することを踏まえ、希望進路の現役での実現と現役合格できなかった生徒が難関国公立大学に合格できる基礎学力の養成をめざす。 ・他府県で先進的な教育実践を行っている高等学校等へ教員を派遣し、持ち帰った資料を活用して校内研修を行う。 イ・30 時間学習マラソンと 100 時間学習マラソンの参加者を増やす。</p>	<p>(1) ア・英語の資格試験合格率（平成 25 年度 57%）を向上させる。</p> <p>イ・携帯・インターネットに関する講演会の実施</p> <p>(2) ア・過去 5 年の実績と今後の高校卒業生数の動向を考慮し、下記の人数を目標とする。 <現役及び既卒> 難関国公立大学 1 名 <現役> 国公立大学 13 名 難関私立大学 80 名 中堅私立大学 110 名 ・2 府県の高専等の訪問と伝達研修の実施 イ・参加者（平成 25 年度 70 名）を増やす。</p>	<p>(1) ア・第 1 回と第 2 回の英語の資格試験合格率は 57.4% と横ばいであったが、合格した級のレベルは上がっている。高校生としては上位といえる 2 つの級を受験するように指導し、資格試験の校内実施をやめ講習にリソースを集中した結果、合格者の内 4 名を除き高校生としては上位といえる 2 つの級に合格している。○ イ・学年ごとに、携帯・インターネットに関する講演会を実施した。 学校教育自己診断に新たに設けた「違いを認め合える学校」の肯定的回答は 84.8% であった。○</p> <p>(2) ア・国立大(13 名)は過去 5 年で最高、国公立大は 2 番目、難関私立大は 2 番目、中堅私立大は最高の合格者数を出した。大阪圏の高校卒業生数の増加が続く中で、高い実績をあげたと評価している。(3 月 24 日現在) <現役及び既卒> 難関国公立大学 0 名 <現役> 国公立大学 17 名 難関私立大学 95 名 中堅私立大学 175 名 ◎ ・長崎県と徳島県の県立の高等学校等各 2 校を訪問し伝達研修を実施した。 3 年生の保護者懇談の回数、志望校検討会参加者、学力診断テスト結果分析会の参加者の増加など、他県の取組みによる触発効果が着実に上がっている。◎ イ・参加者は 48 名と減少した。事前の計画書の審査を厳しくしたことによる影響である。△</p>
---	--	---	--	--